

## 「フェニキア」語,あるいは「カルタゴ(ポエニ)」 語の出所と広域語への変遷

—クラーマルコフの見解を基にしつつ—

楠 田 直 樹

は じ め に

フェニキアあるいはカルタゴを何らかの形で研究してみようと思うと、どうしてもこの表記のタイトルのような疑問が少なからず去来してくる。そういう疑問が生じるということは、もっといえば、私たち日本人にとって最初の用語からすでに不可解さが漂っているといえよう。私たち日本人が耳にするギリシアとかローマといった地名は現実にも存在しているが故に、忘れようにも忘れられない何かがそこには存在している。しかし、フェニキアという言葉もカルタゴという言葉も現実には地名としての馴染みはほとんどないに等しい。つまり、故意に理解しない限り現実には存在しないものである。だからこそ、現実という舞台にそれらを引き出すためには、こんなことをしてみる必要があるのかもしれない。そうした地域で都市で用いられてきた言葉が一体どんなものであったのか、どのように発展してきたのか、という好奇の目は当然のことながら存在する。

では、そんなフェニキア人やカルタゴ人の使っていた言葉は、一体どのようなものであったのだろうか。また、現在は使用されていないといいながらも、

その手掛かりになるものは一体どんなものがあるのだろうか。そしてどんな地域にその手掛かりが残っているのだろうか。こんなことが次々に去来し始めた。

そんなフェニキアの言語について、ヘロドトス (5.58) は、「・・・フェニキアの移住民たちは、はじめは他のすべてのフェニキア人の使うのと同じ文字を使用していたが、時代の進むとともにその言語を（ギリシア語に）変え、同時に文字の形も変えたのである。・・・」（松平千秋訳，岩波文庫版）との一節があるように、フェニキア人たちの柔軟な姿勢がここに見て取れる。商取引を中心とした関係を重視していたからこそ、他者との関係が柔軟になっていったのかもしれない。そうした性格がフェニキア人が消滅したのちにも、各地にその残滓を垣間見る遠因になっているのかもしれない。

こうした疑問をずっと抱いてきたし、どこかで取り組んでみなければならぬという気持ちがあったのだが、なかなかそれを実際に紐解いてみようという気にはなれなかった。そのきっかけになったのが、Charles R. Krahmalkov, *A Phoenician-Punic Grammar, Handbook of Oriental Studies Vol.54*, Leiden-Boston-Köln, 2001. が入手できたことであった<sup>1)</sup>。だから、本質的には、クラーマルコフの見解から逸脱することもなく、それに従ってしまったという方が正しいと思う。それくらい、インパクトがあったし、読めば読むほどその中にのめりこんでいくほどのものであった。そして史料との関わりはとりわけ非常な関心を残してくれるものであった。ただ、いずれにしても、当論考はその端緒にすぎないということは念頭に入れておいて頂きたい。

以下、上述の書物をもとにして、若干の見解を付加して論じてみたい。

## 1. その言葉の始まり

周知のようにフェニキア (Φοινίκη) というコトバは、大雑把には北のアラドから南のネゲブやシナイに広がっていた現在のシリア南部、レバノン、イスラエルに跨っている古代の地域であるカナーン (KNN, ヒブル語では *Kená'an*) のギリシア名である。後期青銅器時代から鉄器時代にかけて、共通の言葉、共

通の文化を分かち持つ共通の起源を持った多数の人々の故郷でもあった。そこではイザイヤ書19.18に見られるように、その言葉のことを *ŠPT KN'N*, すなわちカナーンという言葉と呼んでいた。つまり聖書に見られるカナーン人の言葉である。その初期には、近隣地域まで含めて異なった地域に異なったグループを形成して、そのそれぞれの中で方言が成立したのと同じく、いくつかのグループの中に共通語といわれるものが発生してきた。だから、厳密な意味では、フェニキア語はこのようなカナーン地方の方言の一つだったと考えられる。その使用範囲として考えられるのは、大雑把に北のシドンから南のアッコーに至るレバノンの海岸線で話されていた言語である。

そのカナーンの郊外の地域の名前は、プウト *PT* といい、カナーン人の一派のことをポーンニーム、すなわちフェニキア人といわれていた。地名から転用されてきた氏族名、ポーンニームはその地域のカナーン語の方言をも示している。この地名や氏族名を表わす言葉はギリシア語の *Φοινίκης* であり、ラテン語の *Poenus* で、*punicus* であった。まずギリシア人やローマ人はこの語を知り、フェニキア人と呼称するに至ったと考えられる。また、逆に彼らをしてすでに呼称していた言葉でもあった。

*Pūt* の主要な都市は、チュロスであり、シドンであった。それで、フェニキア人、すなわち *Pōnnīm* はチュロス人とかシドン人と同義に使用され、フェニキア人という語はチュロスーシドン系カナーン人と同義に使用されてきた。だから、フェニキア人、チュロス人、カナーン人という言葉にはそれぞれ同義的に使用されると共に、それぞれの意味を持っていたものと思われる。このようにして、後三世紀に至って、ヒッポ・レギウス出自のアウグスチヌスは次のような情報を残している。アフリカ人をカナーン人、すなわち *Chanani* と記している。一方、ローマ領トリポタニア発掘のフェニキア碑文は同じ頃のリビュアの人々をチュロス人、すなわち *Sorim* と呼称している。

これは、まさしくチュロスーシドン人が後期青銅器時代から初期鉄器時代にかけて南北に広がっているカナーン各地に影響を与えながら拡張していく中で、フェニキア人の話す言葉はその地で市民権を獲得していったといえる。そ

してカナーンの人々の話す言葉に取って代わっていったし、北はアラドゥス（アルウァド）から南のアスカロンやダフナエに及ぶレバノン、パレスチナ、エジプトに至る海岸線のあらゆる言葉に取って代わっていった。しかし、そんな中で、カナーンの北部沿岸のビュブロスは、確かにフェニキアの都市として知られているし、チュロスやシドンの言葉とは全く異なっていたけれども、ビュブロスの言葉はビュブロス・フェニキア語と呼ばれ、フェニキアの言語には違いないのだが、非チュロス・シドン系の言語だといえる。

プウト Pūt やポーンニーム Pōnnīm という用語は、チュロス・シドン勢力が頂点に達していた前九世紀初期に、書かれた記録として初めて現れる。それは前825年とも前814年ともいわれるカルタゴの建設に見られる西地中海における植民活動や商業活動の拡大によって示されている。

では、プウトという地名はどのように我々の前に現れてくるのであろうか。ここに、関係する三つの史料をあげて考えてみよう。

(i) KAI 30 = Cyprus Museum Ph.Insc.No.6

第一行には、戦士たちがプウトから島にやってきた、とあり、第二行と第三行にかけて、その戦士たちがアラシヤ（キュプロス）にやってきて、[中略]島を荒廃させた、とある。

(ii) Cross,F,M., BASOR 238, 1980, pp.2-3

[Y]Š M [B]’LYLŠ, すなわち「パールがエリシャの島を荒廃させた」と出てくる。

(iii) Ver.Aen.I.619-24

わたしは覚えています、テウケルがシードンへ来たときのことを。

祖国を追われて、新しい王国を求めたとき、

ベールスの援助を受けました。そのとき、わたしの父ベールスは富めるキュプロス島を荒らしていました。戦勝により領有していたのです。

すでにそのときから、不幸をわたしは知っていました、トロイアの都のこと、あなたの名前、ペラスギ人の王たちのことも。

[岡道男，高橋宏幸訳]

私の父ベルスは、豊かなキュプロスに侵入し、その地を征服した、とある。「私の」というのは「デイドーの」という意味であり、「父」は「先祖」を意味しているかもしれない。

キュプロス出自の古典碑文 (i) は、キュプロスに侵入し、その地を征服したチュロス遠征軍指揮官の墳墓に記念碑として建立されたものと思われる。そしてその碑文が前1200年頃の陶片碑文 (ii) に言及された事柄と同じものを言及している可能性がある。その典拠はガーザ近くのクブル・アル・ウライダ出土のもので、キュプロス(アラシヤ)への侵入、征服を言及しているものとされる。つまり、この両者は同じ事柄を言及しているのではないかと考えられる。さらに、ウェルギリウスの「アエネイス」(iii)の中での言及も同じ出来事を示しているのではないか。

チュロスの海外活動は、近隣列強、とりわけイスラエル王国との同盟関係を強化しながら、自らの地域における政治的商業的活動を実行していたのと同じ前九世紀に実行されていた。それが王族間結婚という形で出てくるのだが、それこそが自らの活動の活発さを終焉させることを意味していたし、こうした前後関係の中で、民族用語ポーンニームという言葉は、イスラエルの王へ「チュロスの娘」が嫁いでいくことを祝うヘブライの詩(Psalm 45)の中に出てくる。その詩では、名前で言及されていないのだけれども、その結婚はチュロスのイットバールの娘イエゼベルとイスラエルのアハブとの間でのことであったと考えられる。その詩の関係箇所をここで見ておこう。

再構成されたその詩の12bから14aにかけて、このチュロスの王女が懇願されている。すなわち、

*HŠTḤWY LW BT ŠR, // KBDH BT MLK PNYMH*

[彼に尊敬を示しなさい、チュロスの娘よ // 彼を讃えなさい、フェニキア人(Ponnima)の王の娘よ]

とある。ここで、*MLK PNYMH*、すなわち Melek Pōnnīm (フェニキア人の王)という称号は、「チュロスの王」と同義であり、フェニキア人を意味している Pōnnīm はチュロス人と同義だと考えられる。

## 2. プラウトゥスに見られる言葉の使用

ローマの偉大な喜劇作家にティトゥス・マッキウス・プラウトゥス T.Maccius Plautus がいる。彼はフェニキア人がその言語で Ponnim と呼ばれていたという貴重で例外的に特別な情報を私たちに遺している。彼は、最初の戯曲を前200年頃に製作していたのだが、ローマの舞台用にアテナイの喜劇 “Karkhedonios (カルタゴ人)” を翻訳した。その原典は一般的に詩人アレクシス Alexis の作品であったといわれる。ただプラウトゥスが原典をそのまま翻訳したのであれば、この「カルタゴ人」という作品は、娘や甥にとってカルタゴ貴族ハンノの退屈な探求の物語を示している。プラウトゥスはその作品の中のハンノの部分を伯父さん Patruus と呼んでいたが、その作品名は、今日よく知られている名というのはまたの名で、「かわいいフェニキア人 Poenulus」と呼ばれている<sup>2)</sup>。

また、プラウトゥスがこの “Karkhedonios” をラテン語に翻訳する際に、その作品の古代カルタゴ語訳の存在に関して何らかの知識を得ていたと思われる。それを彼独特の喜劇センスと首尾一貫させながら、ギリシア演劇中の古代カルタゴ訳文の部分と彼の翻案であるラテン訳文の部分とを結びつけるという高度なテクニックを駆使することを思いついたのであろう。だから、自身の演劇の中では、カルタゴ人に対して、アレクシスの用いた地味なアッティカ方言のようなギリシア語ではなく、彼ら自身の言語を話させようとしていた。この考えの背後には、二つの意図が見て取れる。すなわち、一つは、異国情緒豊かな古代カルタゴ語の音色でローマの観衆を楽しませることであり、もうひとつは、古代カルタゴ語を作中で駄洒落や誤訳として使用していこうとしたことである。だから、真の会話としての機能をその言語の中に求めていたわけではなかった。それは、ローマの観衆がその言語を理解していたとは到底思えないからである。しかしながら、古代カルタゴ語の “Karkhedonios” から現実の会話文を使用することによって、彼は、古代カルタゴの演劇文学の貴重な一例、すなわち、古代カルタゴ語でのギリシア演劇が存在していたという知識、そし

てフェニキア、あるいは古代カルタゴの言語名が Pōnnīm であったという意義のある典拠を遺してくれている。

ただ、この仮説については、すなわち古代カルタゴ語ないしはフェニキア語の類の翻訳があり、それが演じられていたということに関して、さほど好意的な見解ではないとする方が現在のところでは大勢を占めているようである。しかし、いずれの場合も仮説であるという見解以上のものではありえないことも事実である。だから、可能性の問題として委ねられる。カルタゴでは演劇に類するものがさほど発達していなかったのではないかとする見解がその基盤に置かれている。

例えば、プラウトゥスは、“Poenulus”（「カルタゴ人」）の第五幕第二場で“Karkhedonios”のカルタゴ語翻訳からの方言の若干の断片をそこに含んでいた。この同じ断片的な方言が“Poenulus”の第五幕第二場の985行から991行におけるラテン語訳に表現されている。ここで古代カルタゴ語になされた言及がある。それは青年紳士アゴラストクレスとその奴隷ミルフィオとの会話である。この場面は、カルタゴ人ハンノと彼の側近がまさにちょうど到着した、カリュドンの港である。アゴラストクレスとミルフィオは、その到着を見ながら、どういう人物で、なぜここにやってきたのかを見極める場面である。会話の中でそれがどういうものなのかを追求しながら、言葉の障害が存在していることをいみじくも示している。では、その部分をまず抜粋しておこう。

山沢孝至、「プラウトゥス、カルタゴ人」、ローマ喜劇集 第三卷、京都大学学術出版会、2001年刊の翻訳を、まず挙げよう。

ミルフィオ：いかがです。何かポエニ戦争を憶えておいでですか。

アゴラストクレス：いや全然。だってどうやって身につけられたって言うんだい。

六つのときにあのカルタゴから攫われたっていうのに。

ハンノ：（傍白）不死なる神々よ。ああいうふうカルタゴから姿を消した自由人の子たちが大勢いますわい。

ミルフィオ：いかがでしょう。

アゴラストクレス：何なの。

ミルフィオ：この人にポエニ語で話しかけてみましょうか。

アゴラストクレス：そんなことできるの。

ミルフィオ：今日は私以上にポエニ人らしいポエニ人はいませんよ。

[山沢孝至訳]

鈴木一郎, 「プラウトゥス, カルタゴ人」, 古代ローマ喜劇全集 第三巻, 東京大学出版会, 1977年刊の翻訳を, 次に挙げておこう。

ミルフィオ：(アゴラストクレスに) どうです, 旦那。カルタゴの言葉を少しは覚えていますか。

アゴラストクレス：全然だめだ。六歳でカルタゴの地を離れたんだ。覚えてる筈があるものか。

ハンノ：(ひとりで嘆く) ああ, 永遠の神々よ。ああいうことでカルタゴから自由な市民の子供らが沢山いなくなったんだ。

ミルフィオ：(アゴラストクレスに) ねえ, 旦那。

アゴラストクレス：なんだ。

ミルフィオ：カルタゴから来たこの人にカルタゴの言葉で話してみましょうか。

アゴラストクレス：(たまげて) お前, 話しができるのかい。

ミルフィオ：あっし位にカルタゴの通は, カルタゴ人だっていない位さ。

[鈴木一郎訳]

この二つの翻訳を見比べてみると, いずれが勝るとも劣らない翻訳であるのだが, 意外にプラウトゥスの古代カルタゴ語への想いがわかるような気がするし, プラウトゥス自身の語学的な博識に触れるような気もする。さらに, もう一箇所, 同じ喜劇の1023行と1017a行で原典の形式の中に見られる会話を挙げておこう。

Agorastocles: Mu?

[何だって?]

Milphio: Ponnim sycartum?

[あなたはポエニ語を憶えている]



のか?]

[山沢孝至訳]

Agorastocles: Bal umer! Iadata? [全く。お前は知っているのか  
ね?]

こうしたラテン語とポエニ語との会話の中から、Pōnnīm = Punice という方程式が見え隠れする。もっといえば、ポエニ語を意味する Pōnnīm は、フェニキア人を意味する PNYMH (Pōnnīm) とかなり一致しているのではないかと考えられる。言語名として男性複数所有格 Pōnnīm を使用するのについては、周知のようにフェニキアでは頻繁に使用されている。また、フェニキアの用語についても、古代コルシカ人 KRSYM の言葉によく見られるところである。彼らはサルデーニャ北部に居住していたのだが、そのオリジナリティはキプロスのフェニキア都市キティオンにあり、その碑文の中に表現されている。キティオンについては、前9世紀頃から知られており、とりわけサルデーニャのノラ出土のフェニキア碑文には、ノラの母市であったと記されている<sup>3)</sup>。ノラやサルデーニャから古代コルシカ人がキティオンに多数移住している<sup>4)</sup>。

フェニキア語 (Pōnnīm) は千年以上の間書き言葉としてその繁栄を謳歌してきた。その中で最古の碑文とされるものは前1200年にまで遡及され、逆に最新のものとして見做されているのが後350-400年頃にローマ風のアルファベットで書かれたものだと言われる。元来カナーンという小さな一地方の方言であったのだけれども、前一千年紀初期までに、フェニキア語、すなわちチュロス・シドンのカナーン方言は、チュロスやシドンの商業的政治的支配力のゆえに、カナーン沿岸地域の特権的な言葉として頭角を現してきた。フェニキア商業圏の拡大と共に、この地域からサルデーニャやキプロスへと言語が流れていった<sup>5)</sup>。そのときからすぐに、近東における lingua franca としての立場を享受していくことになる<sup>6)</sup>。このようにして、フェニキア語は東方ではアラム語と拮抗したけれども、西方では力をもった、そして光彩を放った植民地文化の母国語となり、キュレナイカからモロッコ、シチリア、サルデーニャからスペイン南部にまで広がっていった。そしてカルタゴの繁栄と共に、前5世紀初期には、フ

フェニキア語は地中海世界語として広く用いられ、ギリシア語やのちのラテン語の競争相手としての地位を築き、ギリシア文学がその言葉に翻訳されていたとしても何ら不思議さはないようにも思える。その部分については、まだ明確に語ることはできないジレンマが残っていることも事実である。

チュロス・シドンのカナーン方言 (Pōnnīm) が標準語としてレバノンやパレスチナの沿岸地方で人々に受け入れられたけれども、非チュロス・シドン系のフェノキア語も残存していた。不運にも、こうした言語はほとんど知られていないけれども、こうした言語の要素は時として散在している地方碑文の中に見受けられるし、西方フェニキア方言の中に残っている。その特徴らしきものはプラウトゥスの作品の中にも現れていると考えられる<sup>7)</sup>。だからこそ、可能性として、キプロスやエジプト、カルタゴにおける方言の中に、非チュロス・シドン系フェニキア語の要素が小出しにされていたということが推測される。

### 3 フェニキア本土沿岸地域における方言

#### a) 南部沿岸方言群

ただ不運なことに、チュロスやシドンの南部地域における方言に関しては、若干の断片的な情報が残存しているのみである。しかしながら、その地域がチュロスやシドンと密接な関係を保持していたことから、部分的には明確であるといえる一方で、同時に言語の形態音素論上の若干の様相で相違点を浮き彫りにしている部分があるのも事実である。その中で、はっきりと見える意義は、チュロスやシドンから分岐していった言語、すなわち方言が西方フェニキア、すなわちカルタゴにおける言葉の特徴を見せていたと考えるのは妥当なところである<sup>8)</sup>。こう考えてくると、「フェニキア」という言葉の地中海的な広がりを考慮することに何ら違和感を覚えるものではない。

#### b) 北部沿岸方言群

チュロス・シドン系の言語標準からの形態音素論上の分岐は、アラドゥスにおいても認められるところである。カナーン北部でも散在的で広範な例が存在

する。例えば、アスカロンで見られる Mittint やチュロスにおける Metten は北部沿岸都市アラドゥスにおける Mattan Ba'al と同一視されるものである<sup>9)</sup>。この例からも理解できるように、そののちにカルタゴを含む西地中海世界にまで関連する名前、すなわち Mytthumbal, Mitthunbal, Mythunbal, Mytunbalis, Mytthumbalis がそれである<sup>10)</sup>。

次に、ビュブロスについて、見ておこう。ここでは、北部沿岸地域では唯一非チュロス・シドン系の方言に属している。ビュブロスにおけるフェニキア碑文は、一千年紀を跨ぐように13個発見されている。いわゆるカナーン系の言語とは一線を画しているのが、ビュブロス方言だと考えられる。因みに、ビュブロスの言語とチュロス・シドン系の言語との違いは、当然ながらさほど大きいものではない。関係代名詞であるとか、女性単数名詞などの単語に見られるものや完了形の文章表現の中に見られるものである。

音韻論的に考えてみれば、ビュブロス方言は、チュロス・シドン系の方言から分岐し、例えば非強勢の母音aを保持していることを示している。これを示すように、アッシリア人はビュブロスの王の名として、Milk-yasáp とか、Milk-'asáp を記録している<sup>11)</sup>。

ビュブロス方言は、西方フェニキアについては全く無頓着なままであったけれども、フェニキアにおけるチュロス・シドン至上権下においてもそれとは異なった言語体系を維持していた。そしてフェニキア固有の地域から離れて碑文は全く見つかっていない。しかしながら、ビュブロスという都市の中で話されていた言葉がどの程度まで効力を持って継続的に使用されていたのか、歴史的古典語としてどの程度まで知られていたのかは現在のところよく知られていない。

#### 4 西方フェニキア方言群（ポエニ語）（1）

チュロスやシドンは、前1200年頃から西地中海の植民活動を始めた。この頃から西方フェニキアの碑文が出てくる。すでにそれ以前から兆しというのは見

えるのだが、チュロス・シドン系方言の域を出ていない。ここに至って、やっといわゆるポエニ語がもとになったものが見えてくる。例えば、初期西方フェニキア方言の碑文がサルデーニャのノラで前1200年に建立されたフェニキア人製粉業者で小麦商人だった人物の墓石である<sup>12)</sup>。形態音素論や音韻論における他の特徴は、その初期のものとして示唆されているように、ポエニ語がチュロス・シドン系方言の直接的伝播であっただけではなく、チュロスやシドンという小さな地域のものでなく、「大」フェニキアともいうべき地域の方言であったことを、ここで強調しておきたい。

ポエニ語が異なっているということは、所期の西方における典拠から明らかであるのは周知のところであるが、前5世紀以降の典拠の中にもっと明瞭に見えてくる。それはフェニキア語の氣息音の定冠詞ha-がポエニ語では氣息音を伴わない定冠詞a-になる。前406年に年代付けられるカルタゴ碑文の中に、フェニキア語の定冠詞H-が見られるが、非氣息音というポエニ語の形式に従った'-や'a-も見られる<sup>13)</sup>。これからもわかるように、フェニキア語との差異は、ポエニ語に見られる形態音素論的なものではなく、ポエニ語の綴り字の中に見られる留保に起因している。さらに同じ碑文の中に見られるLYRHという語にもそれが残っている<sup>14)</sup>。

音韻論の分野のみがフェニキア語とポエニ語との差異を示しているわけではない。形態音素論の分野にも、その違いは存在している。しかし、そうした違いの中にある発展過程というのはいまだ明確にはなっていない。さらに、ポエニ語の現在形は、フェニキア語の中では知られていない文法形式である。例えば、その中で顕著に見られるのは、限定代名詞Š-, すなわちsi-であり、一般的にポエニ語では間接所有格を表現するものであるだけでなく、フェニキア語では知られていない独立所有代名詞 ŠLY, silli (私の) を形成している。こうした文法的な流れの中からも、フェニキア語とポエニ語との関わりを見ていくことができ、なおかつその変遷が地中海という地域の中で育まれていたことを垣間見ることができる。当然のことながら、この二つの言葉には、大きな関係性が見られることは周知のところであるが、その広がりの中で各地の言葉と深

く関わり、融合していったことが推測される。その中で、中継地点としてのカルタゴの地中海における地理的な好位置を占めていたことも相俟ってその推測を考慮していくのも大きいのかもしれない。

西地中海において、カルタゴがその勢力を満喫していた頃、カルタゴとその勢力圏はギリシア的なものとカナーン的なものをブレンドした独特の文化を形成していた。ヘレニズム時代のずっと以前から、カルタゴ人はギリシア文学をすんなりと受け入れていたし、多数のジャンルにおいて、ギリシア語からのポエニ語翻訳がなされていた。ローマ人によって喧伝され、今日でもローマ人たちがギリシア語を、ギリシア文学を理解するに十分な教養を保持し、それらを再構成する能力を持っていた唯一の民族であったという考え方がある。そして若干の古典学者たちによって同じように考察されている独断的な偏見がまかり通っているところに大きな問題が残っている。それは皮肉にも、ローマ人ティトゥス・マッキウス・プラウトゥスがこうした誤った知識を、ギリシア演劇をローマに移入する中で生じさせていたことも十分に考えられるところである。自動的なフェニキア文化の抹殺、これこそが歴史の皮肉といわずして、一体何が歴史の皮肉になるであろう。しかしながら、ポエニ語によるギリシア演劇という形式がかなり早い時期から構成され、演じられていたという可能性は捨てきれない。ポエニ語による Karkhedonios の中からミルフィオがアゴラストクレスとなしていた会話は先述した通りであるが、ここにその一端が現れているように思えて仕方がない。プラウトゥスは、ポエニ語のよるギリシア演劇をあたかも自覚していたかのように、この *Poenulus* という自らの劇作の中で試した可能性は残っている<sup>15)</sup>。

こうしたギリシア語、ポエニ語そしてラテン語との関わりが色濃く出ていと感じられるのが、プラウトゥスの“*Poenulus*”の会話ではないだろうか。プラウトゥス自身の生涯にはまだまだ謎めいた部分が多いのも事実であるが、とりわけこの作品の中に見える純粹に西方フェニキアの一都市を舞台とした場面にはそうした関わりが見え隠れする。この演劇そのものは、便宜的なギリシア風の喜劇であろうが、そのアイデンティティーの中には何らかの疑問が残るし、

最終的な結論にまでは至らないのかもしれない。この作品についての肯定的な部分は、ギリシア演劇を模倣した翻訳ではなく、原初的な作品であると考えられることも可能性として残しているところである。

## 5 西方フェニキア方言群（2）

上述のような関わりについて、若干の碑文史料と文献史料とともに以下考察してみよう。

いずれにせよ、伝統的なポエニ語文学は西地中海で進化を遂げたはずなのだが、その証拠になるような史料はほとんど残存していない。ただ、その手がかりになるのは、前406年冬のアグリгентゥムへの6ヵ月遠征を叙述したものがわずかに残存しているだけである。それはカルタゴ系碑文として幸運にも残存していた<sup>16)</sup>。その碑文の9行目から11行目にかけて、以下のように記されている。

WYLK RBM 'DNB'L BN GRSKN HRB WHMLKT  
BN HN' HRB 'LŠ WTMK HMT 'YT 'GRGNT  
WŠT H[M]T ŠLM DL B'L NWS (下線は筆者)

[大ギスコの息子イドゥニバルと大ハンノの息子ヒミルコという将軍が夜明けに行軍し、アグリгентゥムを包囲した。そしてアグリгентゥムの人々は、(前夜その町を) 逃れていた人々も含めて、(降伏して) 和平をなした]

この文章構成には少なからず興味深いところがある。つまり、ギリシア人たちの手によって300年以上も前から描かれた伝統の中で、フェニキア人とは人身御供を实践するカルタゴ人として偏見に満ちて描写されていた。その偏見が皆目見えないのに驚かされる。ともかく、その文言を基にしたであろうディオドロス・シクルスの文章は、

ヒミルコは、夜明けに（アグリгентゥムの）城壁内に進軍して、内部に残っていたほとんど全ての人々を殺害した

とある<sup>17)</sup>。ここでディオドロスはアグリゲントゥムの城壁の説明を、都市掠奪の詳細な記述とともに続けている。しかし、このカルタゴ系碑文の発見で、ディオドロスがカルタゴの掠奪とか野蛮さについてギリシア風の伝統を受け継いでいたのか、あるいは文章を誤解、翻訳間違いを犯したのではないかという観点に到達できる可能性を示唆している。一つの推測として、上述の碑文の下線部分を、以下のように読んだ可能性が考えられる。

WTMK HMT 'YT 'GRGNT WŠT H[MT] ŠLM DL B'L NKS

つまり、彼ら(カルタゴ人たち)はアグリゲントゥムを包囲し、そして彼ら(カルタゴ人たち)は掠奪者と殺人者を自由にさせていた、と。こう見てくると、ギリシア人の間に存在していたカルタゴ人への偏見が大きく作用していた可能性を確かなものにしてくるはずである。ディオドロス自身もそんな中で叙述していたことが窺える。

一方、ローマ時代になると、ポエニ語は、カルタゴが滅ぼされたのちも、アフリカの人々や西地中海では話し言葉として残っていたとしても何ら不思議ではない。しかし、この段階の言葉は、いわゆるポエニ語という区分ではなく、新ポエニ語として考えられるものである。その言葉は、のちのセプティミウス・セウェルス帝やアプレイウス、さらにはアウグスティヌスにとっては母国語ともいえるものであった<sup>18)</sup>。また、そののちの時代においても、ポエニ語は伝統的な形を残しつつ、新たなものへと適用しゆく言葉として、意義深い文学様式的一端を残していた気さえしてくる<sup>19)</sup>。

さらに、ローマ時代後期には、ポエニ語の文字は次第にアルファベットに取り替えられてくる。しかしながら、そんな中でポエニ語文字様式は依然として維持されていた。その一例として挙げられるのが、後350年頃の伝統的なカナン様式の詩ではなかろうか。青銅器時代に遡及されるような形式や様式を反映しながら、ローマ領トリポタニアで書かれ続けられた<sup>20)</sup>。そんな中に、ユーリウス・ナシフの諷刺詩的な六歩脚詩が見られる。彼は、植民市アドニムの軍指揮官を務めており、この詩の中で植民市ミュクニムの捕虜を「記念」し、「祝賀」している。ともかく、このように庶民感覚の中にその後も言葉の精神

が生き残り続けていたことを物語っている。

むすびにかえて

こういうふうと考えてくると、「国滅びても、文化は遺る」、すなわちその形は消えても、精神は後に残っていく、ということを思い起こさざるをえない。しかし、それを証明していくのは、想像以上に困難なことである。その上に、時間的にも遠すぎるほどの過去のことである。つまり我々が情報として知りうる部分はさほど多くないということを念頭に置かなければならない。残存史料が極端に少ないということが、時として推測で、あるいは状況証拠的な言い方で進めていかざるをえないというところに落ちていてしまう。これは古い時代のことになればなるほどに、宿命的に立ちはだかつてくる壁である。

いずれにしても、言葉は国家が滅びたからといって、すぐに滅び去ってしまうものではない。そののちにも、その地域、その地方に残っているものである。姿を変え、形を変えても、強制されたとしても、すぐに消えていくものではない。そこに歴史の深さ、精神の逞しさが必ず存在していることを印象づけるものである。現実には、言語そのものが死語になったといっても、である。

ここにこそ、私たちは滅び去っていった文明や文化がどのようなものであったのかを知る手懸りをもっているといっても過言ではない。何千年も前に滅び去っていったものを再構成するためのものは何も形あるものだけではない。その形あるものから生み出されてきた無形のものに焦点を当てるのもむべなるかなである。

さて、以上のような大きな視点はさておき、実際にそのうちの一つ、フェニキア系の言語に触れてみて、その文化の地中海的な広がりを感じるのは事実である。出土する史料が広範囲に広がっていることを見ても、それは明らかである。それがプラウトゥスなどに用いられて、のちのちの世界にまで時間的な広がりを見せていることにも、明らかである。カナーンの地から、地中海の島嶼部を経て、北アフリカへ、スペインへ、というフェニキア商業圏の伸張の中で、



随所にその文化が垣間見られたことは窺い知ることができる。さらには、地中海の支配権がエジプトから、フェニキアへ、ギリシアへ、ローマへ、と受け継がれていく中で時間的経過をもものともせず少しずつ後世に伝えられていったことも理解できる。すなわち、時間的にも空間的にも、まさしく煙のように、気体のように、水のように静かに地中海各地に昇華していったことが見えてくる。

このように言語としての体系ができることによって、それまで以上に、力強く後世へ、各地へと伝播していく礎ができていったのだろう。その意味でも文字が体系立てられていくことは文化の広がりという観点からも大切なことであった。

#### 註

- 1) プラウトゥス、山沢孝至訳、「ローマ喜劇集」 第三巻、京都大学出版会、2001年、640-646頁。そこで山沢孝至氏がクラーマルコフ説の特異性について、若干の批判的な示唆を与えている。例えば、643頁には、「ギリシア喜劇のポエニ語訳が先に存在し、プラウトゥスはそこからポエニ語のせりふを借用したのだ」と喝破しているのだが。
- 2) 前掲書。簡単には、Loeb Classical Libraryの“Poenulus”を参照せよ。その中で、P.Nixonは、この作品がおそらくメナンドロスあるいはフィレモンの作品からではないか、としているが。それがそのままプラウトゥスの作品になったのかどうかは不明であるとも。この作品のローマでの初演がいつなのかも不明としながらも、前191年を考えている。Hüffner (De Plauti Comoediarum Exemplis Atticis, pp.34-5) はほんの一部のみをプラウトゥスが創作し、前194-3年頃に成立したと考えている。山沢氏はアレクシス作品からではないかと述べている。さらに、プラウトゥスと古代ローマ演劇に関しては、プラウトゥス、「ローマ喜劇集」 第一巻、京都大学出版会、2000年にある木村健治、「総解説 古代ローマ演劇とプラウトゥス」、522-49頁を参照せよ。
- 3) KAI (Donner, H. & Röllig, W., Kanaanäische und aramäische Inschriften, Wiesbaden, 1964. 以下KAIと略記) 46; ll.5-6 'M L KTN
- 4) Guzzo, M.G. & Karagheorghis, V., Fouilles de Kition. III. Inscriptions pheniciennes, Nicosia, 1977の A 9A/B; B 40.2; F 1.3,5,6: MLŞ (H-) KRSYM [古代コルシカ語の通訳] とある。クラーマルコフによれば、その数はかなりのもののにのぼっていたのではないかと見ている (A Phoenician-Punic Grammar, Leiden,

- 2001, p.5)。Esmunadonay bin Abdmilqart bin Rasapyaton は ŠRDL, すなわちサルデーニャ人という非セム的な民族用語を用いていた (B 40.1)。
- 5) サルデーニャについては, CIS i 145に見られ, 前1200年頃とされる。一方, キプロスについては, KAI 30.2/3に見られ, 前9世紀とされる。それらの都市はキティオンとの関係が深く, 多数のフェニキア系小王国の中心的な存在であった。
- 6) 前9世紀の KAI 24, そして前8世紀の KAI 26
- 7) Plaut. Poen.940-6. ここでは, いわゆるポエニ語での会話が置かれている。さらに, KAI 9; 10; 24; 26; 30; 50 そしてCIS (Corpus Inscriptionum Semiticarum 以下CISと略記) i 5510.9/11 を参照せよ。
- 8) 例えば, チュロス・シドン系方言に見られる子音 n の扱いがある。titten<tinten とか, mittit<mittitt<mantint のような言葉の変遷から明らかである。Cf. Tiglath. III (Tadmor, H., The Inscriptions of Tiglath-Pileser III, King of Assyria, Jerusalem, 1994) .67.66; Joseph. Contra Apion.1.125; KAI 50; Senn. ii.54; Esar. (Thompson, R.C., The Prisms of Esarhaddon and of Ashurbanipal 以下Esarと略記) v. 57.
- 9) Esar v.60: Ma-ta-an-Ba-'-al.
- 10) Benz, F.L., Personal Names in the Phoenician and Punic Inscriptions, Rome, 1972, pp.356-7.
- 11) Esar v.59: Mil-ki-a-sha-pa. それに対してチュロス・シドン系方言については, ii.84 には, アラドゥス (アルヴァド) の Ba'al-malók (Ba-'-al-ma-lu-ku) とか, Ba'al-yatón (Bel-ia-a-tu-nu) がある。
- 12) CIS i 145. sallat hitfim.
- 13) CIS i 5510.
- 14) Ibid. 「歓迎する」という意味を表している。その綴りはフェニキア語の liyarih の発音を示している。
- 15) クラールマルコフは, その一例としてメナンドロスの喜劇の断片をプラウトゥスの “Aulularia” (黄金の壺) の中のメガドロスとエウクリオとの酒を飲ませるの飲まないのという会話に依拠している。それが569行から572行である。そこには, その依拠する原典も添えている。Krahmalkov, op.cit., p.12.
- 16) (13) に同じ。
- 17) Diod.Sic.13.90.1.
- 18) 帝は前146/5年にレプティス・マグナで生まれ, 詩人はマダウルスで生まれ, また教父もアフリカの出身であった。
- 19) Krahmalkov, op.cit., p.14. ここに彼の言い分の真骨頂が見える。フェニキア語か

らポエニ語への変遷、さらには新ポエニ語への発展の大きな要素がそこにあると見ているからに他ならない。それがさらにはアラブ語へ流用されていく大きな流れを、その中に育もうとしている。だからこそ、北アフリカのマクトル出土のHtr-Mescar 神への三行讃歌の引用にも垣間見ることができる。

20) Krahmalkov, op.cit., p.15. そこには、以下のように掲載されている。

Badnim garasth is on,	[私はアドニムから邪な輩を追い払った
MySyrthim, bal sem ra;	シュルティス地方から彼の風評を
Sab siben Mycne,	わが軍がミュクニムを攻囲した(とき)
Is ab syth sath syby;	そのとき敵を(わが)捕虜にした
In aab sa [l] e (m) lo sal:	敵はその彼に慈悲を求めた
“Un ath ab [dach] al”	「汝に奴隷として仕わせて下さい」]

との文言の中に何を把握するのが問題であろう。

#### 付 関係参考文献解説

19世紀末からさまざまな文法書や辞書の類いが出版されているが、どうも何年間隔かの周期があるように思える。それを考えれば、周期ごとにさまざまな改訂がおこなれているのか、あるいは何らかの新たな発見か発掘が成果を結んでいるのか、などといったことが考えられるであろう。

文法書という観点から見てみると、以下のような書物が近年見られる。

Friedrich, J. & Röllig, W., *Phönizisch-Punische Grammatik*, 3rd ed., Rev. Maria Giulia Amadasi Guzzo, ..., *Analecta Orientalia* 55, Roma, 1999.

Cunchillos, J.-L. & Zamora, J.-Á., *Grammatica Fenicia Elemental*, Madrid, 1997.

Segert, S., *A Grammar of Phoenician and Punic*, München, 1976.

その他、辞典とか語彙集などのようなものには以下のようなものが見える。

Krahmalkov, C.R., *Phoenician-Punic Dictionary*, *Orientalia Lovanensia Analecta* 90, *Studia Phoenicia* XV, Leuven, 2000.

Hoftijzer, J. & Jongeling, K., *Dictionary of the North-West Semitic Inscriptions*, 2 vols., Leiden-NY-Köln, 1995.

Fuentes Estanol, M.-J., *Vocabulario Fenicio*, *Biblioteca Fenicia*, Vol.1, Barcelona, 1980.

Tombback, R.S., *A Comparative Lexicon of the Phoenician and Punic Language*, Missoula, 1978.

そして、各種の碑文集成の類い、関係諸雑誌が考えられる。そうしたものの外に貨幣学関係の書物なども必要になってくるであろう。